シリーズ

発達に違いのある子どもたち

幼稚園・保育園の子の「困った行動」

5月、新しく入園した子ども達も、少しづつ園生活に慣れてきているころだと思います。ひとりひとりの個性が見えてきて、その中には「ちょっと気になる」「ちょっと違う」というお子さんもいらっしゃるでしょう。例えば、みんなの中に入って遊べない子、先生のお話中じっとしていられず席を立ってしまう子、座っていてもお話が聞けていない子、突然近くの子を叩く・咬みつく子、ちゃんとした姿勢が長続きしない子、先生にくっついて離れられない子、朝のお支度が自分でできない子、場面や気持ちの切り替えが難しい子、etc…。そのような子どもの「困った行動」に、私達大人はどのような対応をすれば、子どもが安心して育つ環境を作ることができるのでしょうか。

「困った行動」には原因がある

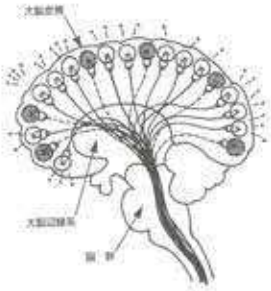
まだコミュニケーション能力が発達途上にある、幼児期の子ども達の気持ちの表現方法は様々で、きちんとことばで伝えられる子もいればそうでない子もいて、「ちょっと気になる」「ちょっと違う」子ども達は特に表現する力が弱いため、その子が発することばや行動、表情、反応、さらには家族との関係、睡眠や食事などの生活状況、ありとあらゆる情報を得て、なぜそうしているのかを想像する必要があります。

例えば突然近くの子を叩くという場合、その行動だけ取り上げれば、人に危害を加えるわけだから叱るのは当たり前かもしれません。しかし幼児期の子どもに対する叱責は、やり方次第ではその子の人生を如何様にも変えてしまいます。必要なのは、その行動の原因を探ること、それに対しどのように対応するかを考えることです。推測が当たっていれば、対応したことによりその「困った行動」は減っていきます。叱ることでその場は凌いでも、原因がわからなければまた繰り返します。

「困った行動」原因を探る

「ちょっと気になる」「ちょっと違う」子どもの「困った行動」の背景の一つには、「脳の働き方の不具合」があります。脳の構造を「電線」と「豆電球」に例えると、「大脳が働く」とは豆電球が光ることで、そのためには電線の中を電気がスムーズに流れる必要があります。脳の働き方に不具合があるかもしれない場合、電線が細くて電気が通りにくかったり、つまり気味だったりする可能性があります（中川信子氏書籍より引用）。

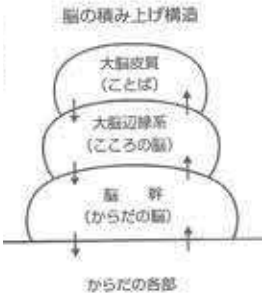
突然近くの子を叩くという行動の背景には、「その子が何かに夢中になっている時に周囲に注意を向けられず、突然間近に人がいたり、声をかけられたりということにびっくりしてしまう」「もともと体に触れられることが苦手で拒否をしてしまう」「相手の意図がわからず、攻撃されたと思ってしまう」「ことばでうまく伝えられずに手が出てしまう」などが考えられます。また、叱られた時に叩かれる経験があると、「叩く」ことをコミュニケーション手段の一つとして身につけてしまうこともあります。



「困った行動」の対応について

脳の働き方は、たやすく変えられるものではありませんが、生理的に苦手な状況があっても、その中で望ましい行動を増やしていくことはできます。その子の「困った行動」、例えば「叩く」の原因が、人に触られることを回避するための攻撃であるのなら、生まれつき人に備わる「原始反射」が強く残っていることが予測され、その場合は本人も理由がわかっていないので、まずは「触られるの怖いね」「触られるとびっくりするね」など、適切な言語表現を聞かせて伝えること、その子にどうしても触れなければいけない時は、「そーっと」ではなく「ぎゅっと」触れる、首筋、脇、脇腹など敏感な場所に触れるのを避けるなど、受け入れられる方法を探りながら進めていきます。子ども自身も、そのような配慮の中で安心して過ごせる体験が重なると、情緒の安定が触れられる恐怖心を軽減することもあります。

「困った行動」の原因に気づくためには、子どもの発達に関する専門的な知識が必要であることも多々あります。そのような時は、保健センターや児童発達支援事業所などの専門機関にご相談されると良いでしょう。



保育園・幼稚園のちょっと気になる子」／中川信子著／ぶどう社